第5回
忘れられない看護エピソード
［一般部門］
内館牧子賞

わかる、わからない、より「わかりたい」

〈北海道〉菅原（すがわら）里佳（りか）　43歳

おじいちゃんが、孫である私のことをわからないと言い始めてから、あっという間に誰のこともわからなくなり、そして一言も口を利かなくなるのに1年もかからなかった。病院へ行って調べたら、最近聞くような病名ではなく、当時の説明では、年齢的にそうなってしまう方が多いと言われたと母が困り顔で話してくれた。

私は小学4年生だったので、おじいちゃんがおじいちゃんでなくなることが信じられなくて、話し掛けても、肩をたたいても「まっしろ」な感じで「誰でもない」感じでそれを受け止めることはできなかった。

そして、おじいちゃんは精神科に入院した。

お見舞いに行くと、看護師さんがおじいちゃんの毎日の様子を教えてくれた。でも、いくら声を掛けても、2人であれだけ観察しておしゃべりした田んぼの稲の様子を伝えても、「まっしろ」な感じのまま。わからない、おじいちゃんが何を考えているのかわからない。正直、子どもの私には変わり果てたおじいちゃんが怖くなっていた……。

何度目かのお見舞いの時に、看護師さんが「今日はおじいちゃんの気持ちを聞くゲームしてみよう」と私を誘ってくれた。紙と鉛筆を用意してくれて、おじいちゃんに手渡してくれた。おじいちゃんはしばらく動かなかったけど、やがて紙に漢字だけを書き連ねた。4年生の私には読めない漢字ばかり。

でもその中に「孫」「稲」という文字を見つけた。看護師さんに「おじいちゃん、まっしろじゃなくて本当はわたしのことわかってるのかもしれない！」と興奮して言うと、「わかる、わからない、よりわかりたい気持ちがあればきっと伝わると思うよ」と笑ってくれた。

それからのおじいちゃんは、「まっしろ」から「透き通った」感じに変わっていった。もう紙と鉛筆を渡しても、字を書くこともなくなった。それでも、看護師さんが「わかりたい気持ち」を教えてくれたから寂しくなかった。返事がなくても、おじいちゃんとのおしゃべりは楽しかった。